

岩手県水産技術センターニュース
シーガルボイス
SEAGULL - VOICE

No.7 1996年7月



4月下旬か5月にかけて誕生したふ化仔魚（右下はふ化仔魚の拡大写真）

水産技術センター種苗開発部では、マツカワの種苗生産技術の開発に取り組んでいますが、今年度、150万尾のふ化仔魚の生産に成功しました。

この結果、つくり育てる漁業のホープ“、マツカワ”の種苗生産技術が、量産化に向けて、大きく前進しました。

写真は今年の4月下旬から5月にかけて誕生したマツカワのふ化仔魚です。

目次

- [特集1](#) [平成8年度試験研究の重点課題](#)
- [特集2](#) [水産情報システムの一層の利用を](#)
- [特集3](#) [「マツカワ」量産化に向け、大きく前進！](#)
- [特集4](#) [「秋サケ来遊予測」ができるまで](#)
- [ズームアップ](#) [企画指導部](#)
- [情報アンテナ](#) [第17回全国豊かな海づくり大会に向け、いざ発進](#)
- [話題1](#) [コンブ収穫体験記](#)

話題2	水温図とは
話題3	漁業指導調査船から情報伝達
トピックス	サケ肉粉末の特許出願
	ゴールデンウィーク中の施設開放
	マツカワ養殖検討会流通部会の開催
	秋サケ魚価対策等を考える講演会開催

[お知らせ](#)

[編集後記](#)

特集1 平成8年度試験研究の重点課題

当センターは、開かれた水産の総合的な試験研究機関として平成6年4月に開所し、今年で3年目となりました。

平成8年度は、斎藤覚所長の体制のもと、つくり育てる漁業の一層の推進や水産加工技術の開発などを研究の基本目標として、鋭意試験研究業務に取り組んでおります。

○新たなつくり育てる漁業の推進

新しい栽培漁業技術の開発

冷水性高級魚のマツカワの種苗生産については一応の目処がつかしました。今後は、種苗生産過程における歩留りの向上と人工種苗にみられる体色異常の発現帽子の技術の開発に努めます。

また、ヒラメ、マツカワに次ぐ新しい栽培漁業種としてマコガレイなどの種苗開発に取り組むとともに、平成9年10月、大槌町漁港で開催される全国豊かな海づくり大会の成功に向け、取り組みます。

増養殖技術の高度化

生産量、品質ともに全国一を誇るワカメについては、岩手県独自の品種を確立するため、バイオテクノロジーなどの先端技術を導入し、新品種の開発に努めます。

また、アワビについては、選抜育種により、成長のよい系統を作り出していますが、今後は、選抜育種した5系統のうちから特に成長の良い2系統間の交雑育種により、さらに高成長の系統を作り出すための技術開発に努めます。

新しい病害防止技術等の開発

ホタテガイ等の毒化予知手法の開発として、1～2週間後の短期的な毒化時期の予知は可能となりましたので、今後は、毒化原因プランクトンの増殖を早期に予測し、長期的予知手法の確立に努めます。

また、タレストリスなどの寄生による養殖ワカメの病虫害の防止手法を検討するほか、漁場保全については、河川や森林などの陸上環境との関連性を検討するため、河川水等の影響調査に取り組めます。

新しい利用加工技術の開発

○

秋サケを素材とした「サケ豆腐」や「スナック食品」などの新製品の開発に努めてきましたが、引き続き消費者ニーズに対応した新製品の開発に取り組むとともに、水産物の高度利用加工技術の開発を推進します。

○水産情報システムの確立

テレメーターブイ（自動海洋観測機器）による水温などの海況や市況情報をコンピューター処理し、漁業関係者へ提供していますが、今後は衛星データなどのリモートセンシング技術を利用し、漁海況情報の一層の高度・迅速化を図ります。

[\[目次に戻る\]](#)

特集2 水産情報システムの一層の利用を

水産情報システムとは

水産情報システムは、当センターの目玉の一つとして整備され、平成6年度から稼動しています。

このシステムは、県内の主要7魚市場の市況情報と県内六つの湾に設置してあるテレメーターブイからの海況情報を、当センターのホストコンピューターに自動的に集めて処理し、漁協等のFAXを通じて、沿岸漁業者や養殖業者などに、迅速かつ正確に提供するものです。

○システムからの発信情報

市況情報（水揚げ情報）

当センターでは、主要7魚市場における市況を市場ごとに**市況日報**として、毎日、情報発信し、これを旬ごとにまとめて**市況旬報**としても発信しています。

海況情報（水温や塩分などの情報）

テレメーターブイのデータを湾ごとに**定地水温日報**、**定地水温旬報**、**定地水温月報**として随時発信しています。

また、岩手丸や北上丸の海洋観測データをまとめた**沿岸定線海洋観測結果**や漁業情報サービスセンターの情報を整理した**海況速報**も定期的に情報発信しています。

さらに、季節的・海況情報として、船越湾の栄養塩の観測データをまとめた船越湾栄養塩調査情報やホタテガイのラーバの出現状況や稚貝の付着状況をまとめたホタテガイ採苗情報も発信しています。

このほか、去る2月中旬には、船越湾のテレメーターブイによる水温値が、7℃台から3℃台に低下したことから、海況臨時情報として、県中南部以北の沿岸域に冷水南下情報を発信しました。

その他

当センターの調査研究の状況や水産に関する様々な情報を載せている本誌シーガルボイスも、保存しておりますので、いつでもご覧になれます。

水産情報システムでは、様々な情報を発信しておりますので、是非、ご覧いただき、活用されることを期待します。

○システム利活用の一例

山田町水産種苗センター

ここでは、町内の養殖業者などを対象に、山田湾のテレメーターの水温情報、透明度速報、増養殖情報などを載せた水産種苗センターだよりを平成8年4月から毎週漁協を通じて発行しています。

釜石漁業用海岸局

釜石漁業用海岸局では、主に漁船漁業者を対象に、テレメーターブイの最新の水温情報を土曜、日曜を除く毎日3回定時連絡の時に、北山崎及び尾崎送受信所を通じて県内全域に無線で放送しています。

(連絡先 TEL 0193-22-4180)

釜石流通団地水産加工業協同組合

釜石流通団地水産加工業協同組合では、秋サケの漁期に、水産情報システムから「秋サケ漁獲速報」を受信し、これを組合員にFAXで送信しています。連絡先 TEL 0193-22-0303)

このように、当センターの水産情報システムを多くの方々に利活用していただけるよう努めて参りたいと思いますので、今後ともご協力をお願いします。

〔企画指導部 寺島〕

[\[目次に戻る\]](#)

特集3 「マツカワ」量産化に向け、大きく前進！

マツカワは冷水性・光西町・高価格という優れた特性から、県ではヒラメに次ぐ魚類栽培対象種として位置付け、平成2年度より種苗生産技術の開発に取り組んでいます。技術センターでは、今年度150万尾のふ化仔魚の生産に成功し、量産化に向け大きく前進しました。現在、ふ化仔魚（眼が体の両側にある）から変態期（眼が体の片側に移動する）までの生残率の向上に取り組んでおり、量産システムの早期確立が期待されます。では技術の現況とこれまでの苦労談を紹介します。

『幻の魚マツカワ』を集める

種苗生産は天然親魚を集めることから始まります。しかし、さすが『幻の魚マツカワ』…集まるのは近縁種のホシガレイばかり。この頃は、マツカワとホシガレイを一緒に扱っている市場が多く混乱…

ついに天然魚捕獲作戦は平成2年に入手した3尾（シーラカンス並）で終わりました。このため、平成2年6月、約千尾の3.7cmの稚魚を日本栽培漁業協会厚岸事業場からトラックで陸送し、2年8カ月の親魚養成後、平成5年早春、初めて稚魚が生まれました。今年、県で生産放流する種苗はこのときの魚の、子供の子供つまり孫に当たります。ちなみに、6歳のおばあさんは70cm、7kgになり、まだ約20尾が健在です。

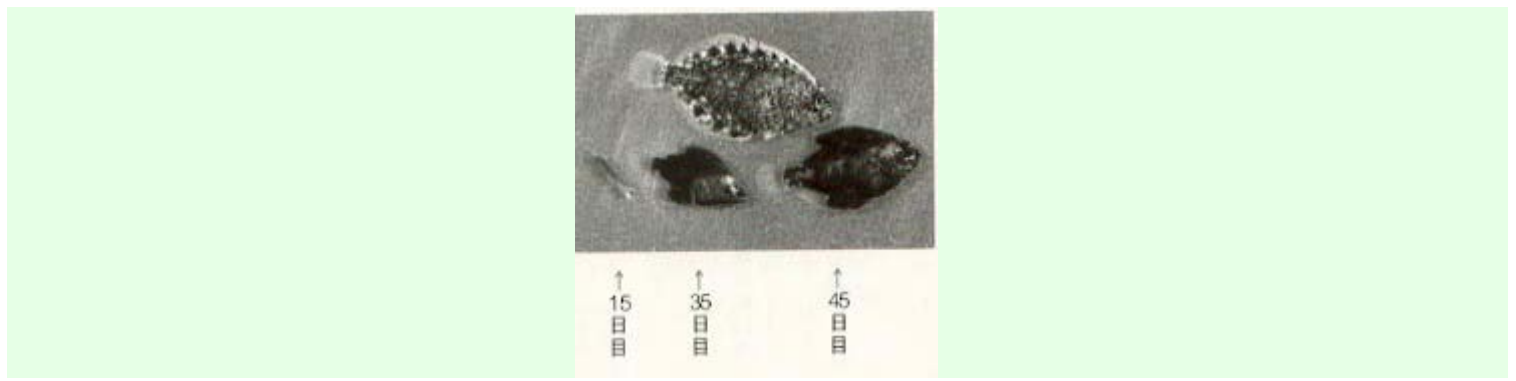
性転換で生まれた稚魚は雄ばかり

人工種苗から親魚への養成に成功したものの、メスの割合が極端に少ないことがわかりました…なんと95%がオスでメスは5%しかいなかったのです。翌平成3～4年に受精卵やふ化仔魚で譲り受け生産した魚からは、メスが1尾も得られませんでした。この宝くじのような確率では、メス親魚の安定確保は不可能であり、平成6年度の最大の課題でした。飼育水温で性比が偏る現象はヒラメでも知られており、当センターで行った15℃以下の低い水温で飼育すればメスの割合が30～40%まで高くなること、同様に北海道の5cmまで14℃以下で飼育することによりほぼ50%という報告から、高温飼育がマツカワの性転換を誘引していたと考えられます。つまり、冷水系のマツカワを、暖水系のヒラメと同じ飼育方法で生産していたため、メスがオスに性転換していたと思われます。この発見のおかげで、メスの親魚生産が安定してできるようになり、また、親魚候補の保育尾数も大幅に減少したため、飼育労力も軽減されました。

オス・メスの性（格）の不一致？

ヒラメなどでは親魚をオス・メス一つの水槽に収容して飼育すると、産卵時期には自然に放卵、放精が起こり、受精卵が得られますが、マツカワは卵は得られますが受精していないのです。そのため、水槽から親を取り上げ、腹を押して採卵し、精子をかけ人工授精を行っているのが現状です。マツカワの鱗は、その名の通り「松の皮」ヤスリと一緒に、採卵作業の度に指の皮も擦り切れます・しかもマツカワは1個体で3～4日毎に10回位産卵するので、採卵作業のもたらず魚へのストレス（人間も？）は計り知れません。良い卵を安定して得るためには、やはり自然産卵による採卵技術の開発が必要です。技術センターでは、雌雄の性成熟を同調させる目的でホルモンを使用した研究を行っており、近い将来、朝出勤すると百万粒の受精卵が浮上している…夢のような光景も夢ではなくなる日がやってくると思っています。

〔種苗開発部 大森〕

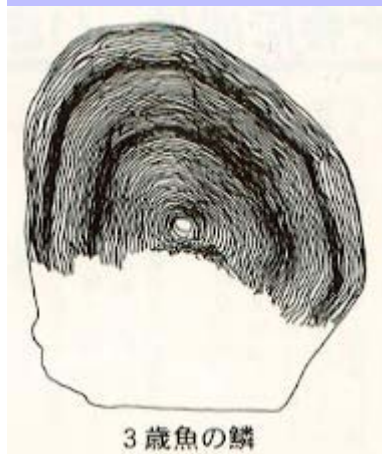


[\[目次に戻る\]](#)

特集4 「秋サケ来遊予想」ができるまで

毎年、新緑がまぶしい頃になると、さけます研究室では秋サケの来遊予想の作業が大詰めを迎えます。秋サケの来遊予想は、再生産親魚の確保、採卵計画・種苗生産計画の立案を主な目的として実施していますが、現在のところ科学的に確立された推定方法がなく、競馬予想と同様、当たりばがりではありません。

しかし、来遊予想値が多方面にわたって影響する可能性があること、サケ・マス類の種苗放流事業を行っている国は、その資源を自国で責任をもって管理することが世界的な流れになっている（それには、自国の資源状態を的確に把握する必要がある）ことから、より精度の高い予想が求められており、そのための様々な推定方法を検討しています。ここでは、日頃、あまり皆さんの目に触れることのない、来遊予想を出すまでの作業を紹介します。



来遊予想と最も高い相関があるのは、前年のシーズンに何歳のサケが何尾帰ってきたかということです。このデータを得るためにはサケの鱗を測定する年齢調査が必要になります。年齢はサケの鱗で判断します。鱗には隆起線と呼ばれる多数の線があり、各隆起線の間隔は成長に応じて広くなったり（成長帯）、狭くなったり（休止帯）します。この狭くなった部分は大体、年周期をもって形成されるので、休止帯の数から魚の年齢を推定することができます。

年齢調査は、県内42河川に遡上したサケから原則として1カ月に3回程度（上旬・中旬・下旬）、雌雄それぞれ200尾程度を目安に、サンプルを採取します。採取した鱗は、スライドグラスに10尾分（1尾につき3枚）ずつ貼り付けてプレパラートを作ります。このプレパラートを用い、万能投影機で年齢査定を行います。最近、二つの休止帯が非常に接近していて判断に迷う鱗が多くなっています。また、年齢査定に用いる鱗のサンプルは5万～6万尾分に達しており、年齢査定にかなりの時間を要します。

こうして得られた各年魚の回帰尾数と、その前年までの各年魚の回帰美数、稚魚の放流数・放流時期、稚魚を放流したときの沿岸水温条件・沖合の適水温帯の広さ等を統計的に処理して、来遊予想を出しています。

〔さけます研究室 佐藤〕

[\[目次に戻る\]](#)

ズームアップ 企画指導部

企画指導部は、平成6年度の水産技術センターの整備に伴い、新設された部門です。漁業経営研究・広報活動、研究課題の総合調整などが主な業務内容です。

○ 主な試験研究テーマ

新規養殖業の経済性の検討

新規養殖業として有望視されているマツカワ、ウニ、トリガイ養殖の経済性を検討し、効率的な養殖経営の展開を図ります。

マツカワについては、岩手のブランド魚として位置づけ、関係者らとともに、マツカワ養殖検討会を組織し、生産から消費に至るまで、官民一体となって取り組んでいます。

沿岸漁業経営の適正化に関する研究

全国平均より低水準で、漁家一人当たり所得も県内農家や勤労者世帯（盛岡）を下回っている沿岸漁業経営体の所得の向上を図るため、漁業種類別経営体別にその生産性と収益性を分析するとともに、これを基に、営む漁業種類の適正組合せモデルの開発を目的としています。

秋サケの価格形成機構の解明

本県の基幹魚種である秋サケは、魚価安となり、秋サケに依存してきた漁業経営は打撃を受け、その魚価対策は緊急課題です。ここでは、秋サケの消費流通の実態を把握するとともに、秋サケの価格形成メカニズムを解明し、秋サケ魚価対策における基礎的知見を得ることを目的としています。

○ 主な企画指導業務

研究課題の総合調整

当部では、当センターにおける各部・室間の研究課題の調整をはじめ、行政機関や他の試験研究機関との連携の際の総合的な窓口となって、連絡調整に当たっています。

水産情報システムの整備

県内6湾に設置したテレメーターブイからの水温情報と主要7魚市場からの市況情報を当センターのホ

ストコンピューターに集め、漁協を通じ、漁業者、養殖業者に情報発信しています。

研究成果の普及啓発について

当センターで得られた試験研究成果については、関係者を対象として、岩手県水産試験研究発表討論会、成果報告会等を開催し、その成果の利活用を勧めています。また、試験研究の成果をまとめた試験研究概要集、研究報告、当センターの最新情報や成果を掲載した本誌シーガルボイスなどの広報誌を発行して、広く関係者へ情報発信し、その成果を普及するよう努めています。

〔企画指導部 石田〕

[\[目次に戻る\]](#)

情報アンテナ 第17回全国豊かな海づくり大会に向け いざ、発進

この大会は、“とる漁業からつくり育てる漁業へ”の一層の躍進と、日本の海の環境保全について認識を深めるとともに、我が国の水産業の振興を図ることを目的として、昭和56年から毎年、全国規模で開催されている水産関係の一大イベントです。平成9年度の第17回大会は大槌町大槌漁港で開催され、これを機に、水産岩手を広く全国にアピールし、本県水産業の発展と地域の活性化を図ります。



この大会の具体的な内容としては、①大会前日に行われる歓迎レセプション、②沿岸地域に伝わる虎舞の大群舞、伝承太鼓などの歓迎アトラクション、③つくり育てる漁業に功績のあった団体等の表彰、最優秀作文の発表などの式典、④漁船パレードの実施、定置網の網おこしの実演などの海上歓迎、⑤新たな魚類栽培の対象魚種であるヒラメ、マツカワなどの放流、などを予定しています。

本年度に入り、テーマ、キャラクターマーク、基本方針を策定したのをはじめ、今後プレイベントとして、シンポジウム、記念水槽の設置、三陸海風土三昧フェスティバルなどを開催して大会機運を盛り上げていくことになっております。

テーマ	魚もぼくもウキウキワクワク海づくり
基本方針	<p>①21世紀に向かって、つくり育てる漁業を推進し、本県水産業の未来を切り開く大会とする。</p> <p>②次代をになう青少年が積極的に参加し、新しい発想による明るく楽しい大会とする。</p> <p>③地域が連携し、本県水産業を全国にまると情報発信する大会とする。</p>

[\[目次に戻る\]](#)

話題1 コンブ収穫体験記

今、釜石市平田ではコンブの収穫からボイル、塩蔵までの加工作業が朝早くから行われています。県内の養殖コンブの生産は、北海道に次いで全国第2位の位置にあり、全国生産量のおよそ3割を占めます。また、県内の魚種別生産量においてもサケ・マス類、養殖ワカメに次ぐ生産量を誇っています。収穫されたコンブは干コンブ、すきコンブ、湯通し塩蔵コンブ、湯通しきざみコンブなどに加工され出荷されています。

県内の今年の収穫は、早いところで5月の連休明けから始まりました。6月に最盛期を迎え、長いところでは8月の10日前後まで収穫が続きます。今年のコンブの成育状態は各地で成長・色にばらつきがあります。

今年、岩手県職員として採用され水産技術センターの増養殖部に配属となった私は、主にワカメの担当となって働くことになりました。そこで海藻類、養殖業に対する経験を積もうと、5月17日、平田漁協組合員の前川さんのところで、コンブの収穫からボイル塩蔵までの作業を体験してきました。この日は、朝の2時30分に出船し収穫へ向かいました。収穫は慣れた手つきで行われ、約1時間ほどで船はコンブで埋め尽くされました。それを岸壁に運びボイル、塩蔵作業へと移ります。ボイル、塩蔵作業は6～7人で取り組み、役割分担を決めて効率よく作業を進めます。作業は、ボイル→箱切り→選別→塩蔵といった流れで進み、この日収穫したコンブは9時に塩蔵までの作業を終えました。私はここで、この日の作業を終えましたが、この後も前々日に塩蔵したコンブの箱詰め作業などが午後の3時まで続きます。ここ平田では、5月10日から収穫が始まり6月10日前後まで続くそうです。

最近の傾向としては成育が思わしくなく4、5年前なら箱切りで10切り分取りましたが、最近で4～5切り分ほどしか取れないようです。朝早いのはなぜかと尋ねたところ、コンブに日光がなるべく当たらないようにとの配慮からと、多量のコンブを扱うため、朝早くから始めないと一日で終わらないためとのことでした。

たった一日ではありましたが、コンブ養殖業を直接体験することができ良い経験になりました。

〔増養殖部 山口〕

[\[目次に戻る\]](#)

話題2 水温図とは

水温図とは

海況図とも呼ばれます。水温観測によって得られた結果を、数値ではなく等温線で表現したもので、なかでも、表面水温の観測は特別な機器を必要とせず、船の航走水温などを利用するため、データが入手しやすく、広く水温図として利用されています。ただ、表面水温は気象による影響を受けやすいということはあるのですが、入手のしやすさ、迅速さを考えると、表面水温図の利用は操業を行う上で、利用価値の高い情報と言えます。

等温線の書き方

等温線とは水温の等しい点を連ねた線です。1℃ごとに線を引き、5℃おきに太くします。しかし、実際、水温を測定すると、11℃とか25℃のようにピッタリの水温を示すことは少ないので、周辺の観測データから按分しながら、ピッタリの水温の線を引いて作成します。これにより、7℃とか8℃の線の間にある部分は、7.2℃とか7.9℃のような7℃台の水温を意味します。同様に、20℃と21℃の線の間にある部分は、20.6℃とか20.7℃のような20℃台の水温と読むことができます。

水温図の見方

1枚の水温図から、いろいろな海況情報を読みとることができます。

沿岸域では、前浜が何℃なのか知ることは、養殖管理をする上でも重要です。

また、沖合域に目を向けると、親潮や黒潮系の暖水、暖水塊などの大まかな位置関係が判断でき、海の水塊配置がわかります。なお、表面水温は気象に大きく影響されますので、親潮や黒潮系の暖水が1年を通じて何℃と決めることができないことが限界と言えます。つまり、その判断には深い層の水温図や塩分値が必要となってくるのです。

親潮は千島列島から道東を通り、三陸近海に南下しますが、北から南へ目をやると、等温線の幅が狭くなって密になっているところまでが、おおよその親潮の位置となります。また、黒潮は犬吠埼付近から東に向かって流れており、その一部が暖水として北上し、黒潮系の北上暖水として三陸近海まで達します。この分布を把握するには、親潮とは逆に、南から北へ目をやると、等温線の幅が狭くなって密になっているところまでが、おおよその北上暖水の位置となります。なお、この等温線の幅が狭くなって密になっているところを潮境とか前線と表現し、この前線付近では強い流れが認められます。暖水塊はこの北上暖水の先端が切り離されたもので、等温線が円状に囲まれて見えるのが一般的です。金華山～本県沖合を中心に分布することがよくあります。三陸沖合から近海へと西に向かい、その後釧路沖まで移動することが多いのです。

なお、表面水温図では親潮や北上暖水そのものの位置を知るためより、むしろ10℃とか15℃の線がどこにあるかといった、等温線の動きに注目することの方が、通常の利用方法かと思います。毎回水温

図を見て、等温線の動きに注目していけば、これからの水温の動向を、予報官になった気分で推測できるようになるかもしれません。

〔漁業資源部 高杉〕

[\[目次に戻る\]](#)

話題3 漁業指導調査船からの情報伝達

漁業指導調査船からの情報伝達システムについて紹介します。

当センターの漁業指導調査船は、定期的な海洋観測のほか、様々な調査研究に携わっています。これらの業務、特にイサダ、イカナゴ、イカ釣り、サンマ、秋サケといった季節的な調査研究の中で得られた情報は、操業中の漁船にとって直ちに役立つものですから、漁業無線を利用した伝達システムによって提供され、有効な活用が可能となっています。

秋サケのはえなわ漁船を対象とした場合を例にすると、指導調査船の調査結果（調査海域、水温、漁獲状況等）が、釜石漁業用海岸局から県内の各漁業用海岸局に連絡され、そこから操業中の各漁船に放送されるとともに、指導調査船からも直接に放送されます。

釜石漁業用海岸局及び指導調査船からの放送は、漁業種毎に所定の時間と周波数で行われておりますので、それぞれ確認のうえ、最新情報を有効に利用してくださるようお願いします。〔漁業資源部 高橋〕

釜石漁業用海岸局からの放送内容

定時通信	随時通信
<通信時間> 04：15～04：30、05：15～05：30、08：15～08：30、11：15～11：30、14：45～15：00、17：00～17：30、20：00～20：15、23：30～24：00 <放送内容> 海上気象予報、各湾水温情報、市況、漁海況、指導船調査情報、周知事項等	海上警報、霧、地震、津波等の情報を入手次第放送
※ なお、放送にかかる詳細は釜石無線局までご連絡下さい。（TEL 0193-22-4180、FAX 0193-22-2621）	

[\[目次に戻る\]](#)

トピックス

サケ肉粉末の特許出願

この度、当センターで技術開発したエクストルーダーによるサケ肉を用いた組織化物の製造法について、岩手県では（株）日本製鋼所と共同で特許出願をしました。出願内容は、サケ肉を粉末化した後、

水分を添加してエクストルーダー処理することによって、組織構造を有する畜肉状の食感をもった素材が得られるといったものです。嗜好性の観点からは解決しなければならない課題が多いのですが、サケ肉からサラミソーセージ等の製造が期待できる技術と考えられます。

〔利用加工部 上田〕

今年も好評ゴールデンウィーク（GW）中の施設開放

開かれた試験研究機関を目指して、今年もGW期間中の自由見学を受け入れたところ、7日間で2,124人もの方々が訪れました。見学者の大半は、家族連れの皆さんでしたが、県外の方も多く、開所3年目ともなり当センターへの理解が進んできたものと考えております。

今後は、皆さんからの意見、感想を取り入れ、さらに見学内容の充実に取り組んでいくことにしております。

〔総務部 前川〕

マツカワ養殖検討会流通部会の開催

平成8年5月14日、当センターにおいて関係者約30名が集まり、平成8年度の販売、出荷体制について検討しました。

本年度は白身魚の刺身等の需要が見込まれる県内の温泉地や観光地を対象に、積極的なPRを行い、産地中心の販売促進を行うことにしています。

また、今回は、三菱商事（株）の小野昭顧問を囲んで、消費地における活魚出荷のノウハウと題してお話をいただき、マツカワの販売戦略に関して意見交換を行いました。

〔企画指導部 石田〕

「秋サケ魚価対策等を考える講演会」の開催

平成8年6月19日、当センターの大会議室において、水産関係県職員を対象に、水産経済経営研究所の松下晃一所長から、「水産にいま何が必要か“秋サケ漁業再構築への視点”」という題で、講演をいただきました。

〔企画指導部 寺島〕

[\[目次に戻る\]](#)

お知らせ

平成8年度水産技術センター主要行事（計画）

- ・ 6月12～13日 松尾村 **東北ブロック水産試験場等連絡協議会場長分科会**（総務部）
- ・ 7月20日～9月1日の土日 **水産技術センター夏休み週末自由見学デー**（総務部）
- ・ 8月下旬 当センター **平成8年度第1回水産試験研究発表討論会**（企画指導部）

- ・ 8月28～29日 当センター **東北ブロック水産試験場当連絡協議会庶務分科会**（総務部）
- ・ 9月11～12日 当センター **東北ブロック水産試験場等連絡協議会全体会議各分科会**（企画指導部）
- ・ 9月下旬 当センター **水産団体・沿岸市町村との懇談会**（企画指導部）
- ・ 10月下旬 秋田 **日本水産学会東北支部大会**
- ・ 11月上旬 当センター **水産技術センター公開デー**（総務部、企画指導部）
- ・ 1月中旬 仙台 **日本水産学会東北支部例会**
- ・ 1月下旬 **平成8年度第2回岩手県水産試験研究発表討論会**（企画指導部）
- ・ 2月中旬 盛岡 **平成8年度岩手県水産試験研究成果報告会**（企画指導部）

編集後記

近年、自治体においてもCI活動が盛んに行われています。CIとはコーポレート・アイデンティティの略語で、その活動は、組織体が自らが何であるのかを認識し、組織体のらしさづくりや魅力づくりを行うことです。コクがありキレがあるビールで業績好調のA社は、会社員の危機意識のもとにCI活動が効を奏しました。

当センターも開所して3年目に入りました。訪れた方がまた足を運んでみたくなるような組織づくりに、当センターにもCIへの取り組みが必要と考えています。ご意見をお寄せ下さい。〔編集委員長 副所長 上村俊一〕

[\[目次に戻る\]](#)